

2015年(平成27年)

4/16(木)

Thursday

きよこの

発言

私は昭和29年生まれ。そのころ、森永ヒ素ミルク中毒事件が発生し、西日本各地の乳児(被害者1万2千人、うち死者130人)に健康被害をもたらした。食の安全が問われました。「あれだけ毒入りミルクを飲んで、よく助かったもんだ」。これは亡き母から何度も聞かされた言葉です。この出来事は支援学校に異動になった際、重複障がいの子どもたちと関わっていく中

高谷 和生

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク事務局長

命の重み

で、命を考える原点となっています。県内には障がいが高く、経管栄養やたん吸引などの医療的ケアが必要な子どもたち六十数人が学んでいます。入学時、保護者は「果たして学校が何をしてくれるのだろうか」と不安な日々です。

その後、いろんな学校生活を体験する中で表情が見違えるようになり、瞳も輝き、子どもたちの未来の可能性を親も教師も実感するのです。ただ一方で、どんなに頑張っても、障がいの進行や病気などから天国に召される子どもたちもいます。日々教師は保護者と一緒に、子どもの命に向かい合っているのです。

今、わが家では闘病生活を送る父と向き合い、生まれ育った高瀬の思い出や学友が亡くなった空襲体験を聞きながらその命を見つめています。

民間人を含めた太平洋戦争の犠牲者310万人の一人一人に命がありました。国が、戦争で命の長い、短いを決めるのは理不尽です。戦後70年、子どもたちや父親の命に向き合い、この思いを強くしています。

2015.4.16